平成元年(1989)

個展を前提とした作品制作研究⑹

第6回個展・画廊沖縄　in　Naha

金城　満

１．展覧会名：

金城満個展チルダイとハーダーリーの不協和音

２．趣旨：

それぞれのフォルムが屈折しながら関係を保っている。屈角の微妙さは、休日の真昼間に泡盛を飲びてピンクフロイドの不規則なバランスでカチャーシーを踊っている様なものだ。最近の金城満の変貌は目が離せない。不揃いのものたちの豊かなコミュニケーション、金城氏のドゥーワジーとドゥチュイムニーの画面がすばらしい。

（画廊案内より）

３．材料技法

ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

４．展覧会場

画廊沖縄

５．展覧会期

1989年02月07日（火）～21日（火）　※14日間

６．開館時間

10：00～19：00

７．無料

８．企画

画廊沖縄

９．作品リスト

No.	作　品　名	サイズ（ｃｍ）	材　　料	制作年月	備　考
90	ねみみにみみず	50.0 x 50.0 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
91	サイクル	50.5 x 50.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
92	目の上のタンコブ タンゴ	50.0 x 50.0 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
93	イエローノイズ	50.0 x 50.0 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
94	管理社会	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
95	交通渋滞	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
96	内から	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
97	テレパッシー	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
98	かごめかこめ	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
99	ｍｏｏｎ	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
100	印	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
101	あなーきー	45.5 x 45.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
102	ダムに沈む村	52.0 x 50.0 cm	発泡スチロールに綿布石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
103	赤い糸	90.0 x 90.0 cm	発泡スチロールに綿布ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
104	プログラム	150.0 x 150.0 cm	ハニカムボードに綿布、石膏(ボローニャ)地　、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展、県展知事賞受賞

105	ＧＵ	45.5 x 55.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
106	ＧＩ	27.0 x 55.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展
107	ＧＡ	26.0 x 55.5 cm	ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔	1989 年	第 6 回個展

10. 関連イベント

アーティストトーク

11. 考察（報道等資料）（pp.17-22）

⑴沖縄タイムス 1989.02.06　10 月展覧会紹介

⑵琉球新報 1989.02.24　展評/めくるめく色の輝き-スピード豊かな筆の走り
（沖縄県立高校教諭／翁長直樹）

⑶沖縄タイムス 1989.03.05　２月美術月評
（沖縄県立芸術大学助教授/与儀達治）

⑷The Gallery Voice-No.6
インタビュー　金城満氏（画家）
-コンセプトアートを超えて

⑶沖縄タイムス 1988.10.14　（同時期同シリーズ作品）
県知事賞に金城満さん

「ねみみにみみず」50×50cm　テンペラ＋油彩＋箔

第98回企画

＝チルダイとハーダーリーの不協和音＝

金城　満展

■1989年2月7日㈫～19日㈰
■画廊沖縄　(AM10:00～PM7:00
13日㈪は休廊です)

POST CARD

□□□-□□

■金城　満展／2月7日～19日

それぞれのフォルムが屈折しながら関係を保っている。屈角の微妙さは、休日の真昼間に泡盛を飲びてピンクフロイドの不規則なバランスでカチャーシーを踊っている様なものだ。最近の金城満の変貌は目が離せない。不揃のものたちの豊かなコミュニケーション、金城氏のドゥワジーとドゥチュイムニーの画面がすばらしい。皆様のご来廊お待ちしております。

art　画廊沖縄
ART GALLERY OKINAWA
那覇市泉崎2-2-3
☎0988(34)6760
画廊沖縄

OPEN
AM10:00～PM7:00
(毎週月曜日休館)

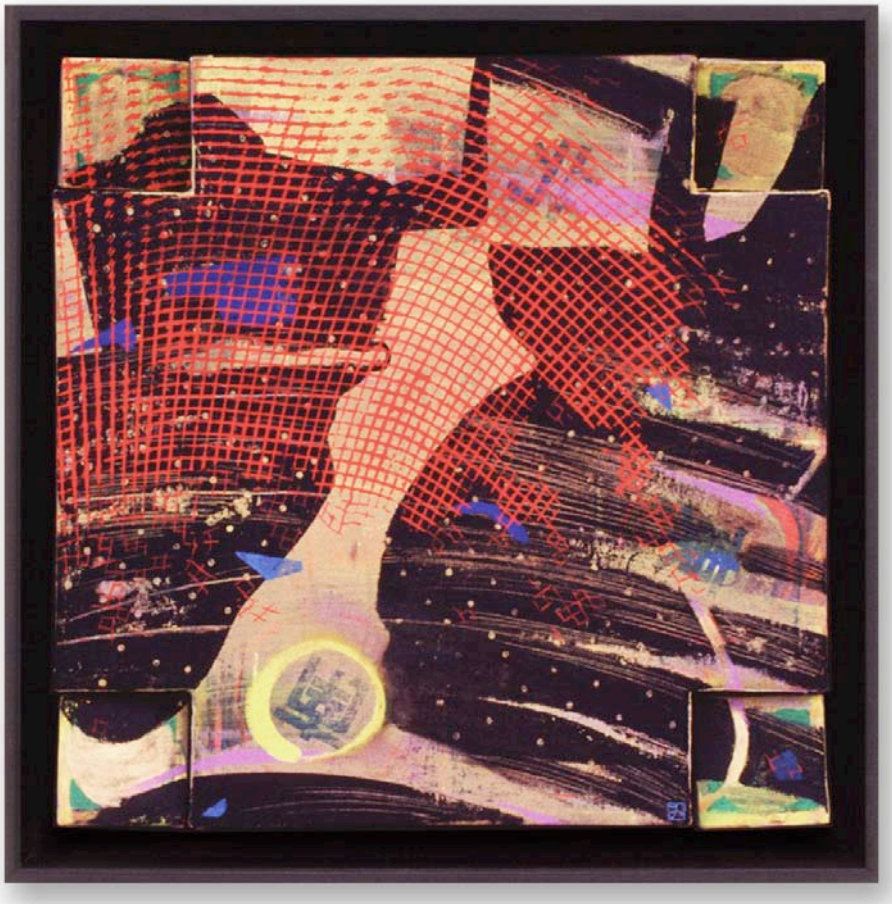
サイクル
50.0 ×50.0cm　1989年ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

目の上のタンコブタンゴ
50.0 ×50.0cm　1989年ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

内から
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

テレパッシー
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

イエロ−ノイズ
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボ−ドに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔



MOON
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

交通渋滞
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

かごめかこめ
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

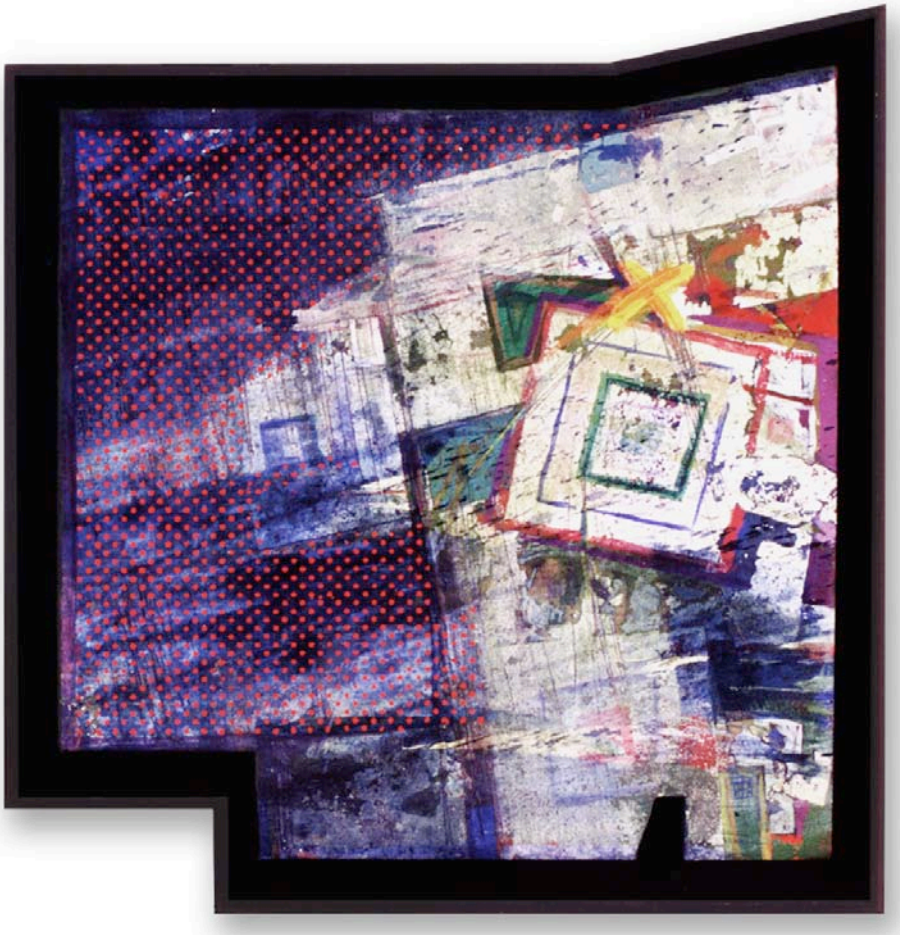
管理社会
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

あな−き−
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ
地、テンペラ、油彩、箔

赤い糸
90.0 ×90.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布ジェッソ
地、テンペラ、油彩、箔

プログラム
150.0 ×150.0cm　1989年ハニカムボードに綿布、石膏(ボローニャ)地　、テンペラ、油彩、箔

印
45.5 × 45.5cm　1989年ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔



ダムに沈む村
52.0x50.0cm　1989年
発泡スチロールに綿布石膏(ボローニャ)地、テンペラ、油彩、箔

ねみみにみみず
45.5 × 45.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ
地、テンペラ、油彩、箔

ＧＵ
45.5 × 55.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

ＧＩ
27.0 × 55.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

ＧＡ
27.0 × 55.5cm　1989年
ハニカムボードに綿布、ジェッソ地、テンペラ、油彩、箔

沖縄タイムス

平成元年（1989）年02月06日

89. 2. 6

展覧会から

きゅうしょう絵画・版画展（二月二日～九日、辻アートギャラリー）

旧暦の正月を祝って沖縄を代表する作家の作品―油彩、水彩、版画など三十六点。大嶺政寛の水彩風景画、大城皓也の幻想的な緑と紫の裸婦、玉那覇正吉の「暮れ色に咲く」と題したほのかな白の花、稲嶺成祚の「壺と緑の手」は緑を基調に厚いマチエールの油彩などふだんあまり見られない画風の作品なども展示され、若いころの作品等をしのばせる興味深い展示会。

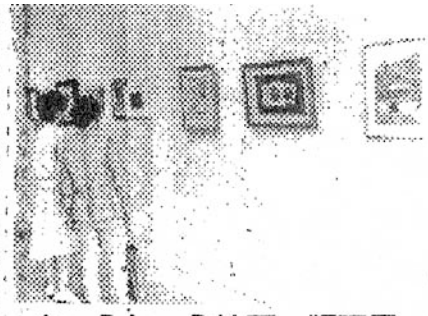
金城満展（二月七日～十九日、画廊沖縄）

黒い木枠の中に発泡スチロールに張った厚みのあるキャンバスをはめこんで、幾何学のさまざまな形を描いたテンペラ画。緑、黄色、白、茶、紫といろんな色のトーンが試みられているがどの系統の色もよく調和し、色使いのうまさが光る。

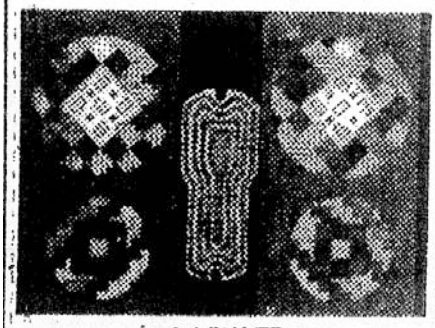
モダンな作風ながら色がなぜか古典的で不思議な落ち着きをかもす。

与那覇朝一作陶展（二月七日～十九日、ギャラリーみやぎ）

壺を主体に南蛮焼きの陶器をそろえた。全体的によく焼きしまり灰かぶりの具合、微妙な窯変による色の変化と味



きゅうしょう絵画・版画展



金城満展

与那覇朝一作陶展

琉球新報
平成元（1989）年02月24日

第3種郵便物認可　琉球新報

文化

金城満の世界

翁長　直樹

めくるめく色の輝き

スピード豊かな筆の走り

金城満の作品に最初接したとき、その目もくらむような色彩に圧倒されたものである。補色の多用と金箔、銀箔の放つ絢爛たる光とスピード豊かな筆の走りは、まさに新しい色彩の画家の誕生を十分に感じさせるものであった。それまでの沖縄の色彩といえば、原色を使ってもどこかくすんでいて色そのものの輝きに欠けていたが、その因はどちらかと言えば色彩の技術に関するセンスの問題では、という感じが僕自身はしていた。基本的な混色のまずさや、ポイントになる色の見せ方の工夫、あるいは画材の選択の幅の狭さによるのではないかと思う。金城満の作品の色彩の輝きは従来の技法と異なる、いわゆる混合技法によるところが大きい。テンペラと油彩、アクリルの異種の画材の併用により、湧き出てくるような鮮やかな色彩が可能となったのである。いかにずばより色彩豊かに見えるかを様々な画材と技法を試すことにより、氏は獲得したものと思える。

画材や技法を熱心に研究し、様々な混合技法を駆使する作家が日本で増えてきたが、沖縄ではここ数年の現象である。これは最近のニューペインティング風表現主義的絵画や毛ノ派的ニュー自然主義あるいはネオ・ジャポニスムとでも呼べば良いような傾向と並んで時代をよく表していると思える。モダンという時代が終って、各が個人に帰り、大きな物語を語ることをやめ、極めてマニエリスティックに自己に偏していく時代の気分をよく映し出しているといえよう。それは細部にこだわり、差異をみつけ拡大していくことでもある。

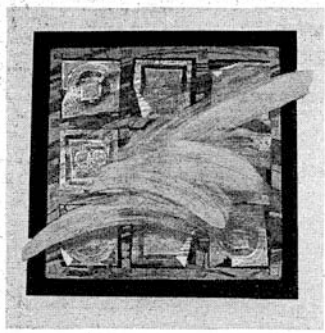
そのような時代のコンテキストに金城満も無縁ではあるまい。氏の絵づくりは無意識的？　かつシステマティックである。できるだけイメージを排除し、エスキースなしにフリーハンドによる幾何形態を核にして次々と形が形を生み、色が色を呼びあうような方法をとる。「形（物）が自分からやってくる瞬間を待つ。去来する〝彼等〟を瞬時に受け入れるか否かを判断し、素早くつくり上げていく」概念や思考よりも極めて身体感覚に近いものに依っている。作品には過去の様々な現代美術の自在な引用が見られ、氏自身にとってそれらはすべて並列に扱われる。

疾走するブラッシュストロークが原色の幾何形態の群れを覆う、キャンバスを切り分ける、あるいは不揃いの格子を使用する。それらは絵画（社会）という秩序を揺さぶろうとする。ところが金城満の作品には必ず枠が取り付けられる。そのことは絵画という枠（制度）の中にしか作家は生きられないという苦渋と締念に近いものが感じられる。一見自由自在な世界に見えながらである。

ともあれ豊かな色彩感覚としなやかな感性が今後どう枠を乗り越え、展開していくか期待したい。

（沖縄県立高校教諭）

（金城満展は7日から19日まで画廊沖縄で開かれた）



「イエローノイズ」（テンペラ）
金城満

沖縄タイムス

平成元年（1989）年03月05日

沖縄タイムス　1989年（平成元年）3月5日　日曜日　文化

美術月評

〈2月〉

与儀 達治

寂然とした作風

真栄城 悟展

抽象の彩る世界

三姿態ほうふつの色相

喜久村 徳男展

「ドゥチュイムニー」の世界

金城 満展

変貌のあとの寂しさと笑い

〈儀間比呂志版画風土記「いま沖縄」展〉

真栄城悟作品

【ヤマガタヒロミチ展】

自由の女神百周年記念事業団の祝典ポスター作品に入選しレーガン大統領を会長とする「人類飛行二百周年記念」にロックを踊るグループ、場内をローラースケートでかけ抜ける「人類飛行二百周年記念」の絵画の前の情景であるが、観衆がすりまわる若者の長い列などと奇想天外なパフォーマンスをくりひろげる。ラジカセの音響が聴こえてくるようである。

財団祝典ポスター原画作品にも選ばれたというヤマガタヒロミチの作風は密集する都会のビルと民衆のざわめきが精緻を極めた技巧で表現されている。

シルクスクリーンによる、淡い乳白色から藤紫、濃緑色まで多色を重ねのままにあやったきらびやかな作品である。美術館と通ずる作品はクロードモネの「睡蓮」の絵

ヤマガタヒロミチ作品

【喜久村徳男展】

抽象表現の作風には現実の事象を全く手がかりにせず、純粋に抽象の世界に身をゆだねる方法で、発想としては心にわだかまっている幻影となり、形像、イメージを画面に定着させる作画がある。喜久村はわたがまるイメージを追う人のようである。今回モノクロームの作品と彩色の作品二十数点を見たが墨のにじみのおぼろの形が野中の人影に判じられたり、部屋の一隅に横たわる孤の人に見えてくる。また深いブルーを背景に淡い線が走り、白、オレンジ、紫の色面が三様の姿態をほうふつし、濃緑の空に口をあけて叫ぶ透明な人体に作者の一面がかいまみえてくる。

【浦崎常栄水彩画展】

浦崎は今、上昇潮に乗るがごとく、作意旺盛に燃え、傑作の作品が表出している。先に見た個展はこれまでのエポックをなすに納得できる充実した発表であったし、今回の我のスケッチ散策も作者の好調な状態を語っている。久茂地川にかかる橋ごとの視野を楽しくおだやかな構図していくリズムがそれである。

身近な路地裏のくらしを描き、昼夜の表情が一変する枚数の「腰巻」スケッチするペンの動きが見る側にも心地よくつたわってくる。

【瑞慶村むつみ個展】

那覇市民ギャラリーの広い会場を埋めた多くの作品はほとんど一九八七年、八八年の二年の短期間にかきあげたもので、熱っぽい制作意欲を秘めている。石油基地をテーマにした「島」「基地」のシリーズに現代を慟哭する熱い視線があり、洞窟の岩肌、形に重厚なマチエルでいと都洋神秘（やゆ）するかのように平面が飛ぶ。頭脳、骨髄（はきず）の解説、生徒の文者の戦争追体験を託した「戦後」の連作。また人コピー等つながりにとまどう。着想は家内状況にある「金魚」の中で一等の抽象表現と作風が多彩になっているが、瑞慶村が真に執着するテーマをつぎ次回に見たい。

【金城満展】

一九八四年琉大美工科卒展で苗圃の注目をあつめた金城は八六年県展で受賞八七年沖縄タイムス賞、上野の森美術館賞を得、八八年県展知事賞を受テンとんど一九八七年、八八年の展覧に、上野の森美術館賞を得、八八年県展知事賞を受テン（もろ）さである。作者はそ

喜久村徳男作品

【大城千賀子「記憶のかたち」】

厚手の木片とベニヤ板を幾重にも張り合わせた壁を素材に、画中の立体造形を浮みあがらせる。

【牛渡悦子絵画展】

岩肌、水面の緑、草原等が反発する森の効果を楽しむように黄色の線描を黒い面が御している。

【儀間比呂志版画風土記「いま沖縄」展】

儀間さんの個展会場はいつも声高な感覚でにぎわっている。儀間さんの声の大きさにくわえて、観衆が作品の鑑賞に素直に引き入っている大らかな雰囲気がある。

今回「いま沖縄」と銘うったのは一九六年に版画風土記沖縄を出して、儀間さんの

儀間比呂志作品

言う「あれから二十三年。日本復帰、海洋博、国体と、沖縄はあれよあれよと巻き込まれるようにそのなかにひろがる空間、その中に飛び交う赤、緑の強いコントラスト、一変してなんか赤褐色系の緑配雑と動き、今回その緑配雑のグリッドの線上にあってなお周囲の岩肌、「島」「基地」のシリーズに現代を慟哭する熱い視線を風刺するように、また、那覇の石畳（やゆ）するかのように平面が飛ぶ。頭脳、骨髄（はきず）の解説、生徒の文者の戦争追体験を託い）の解説、生徒の文者の戦争追体験を託した「戦後」の連作。また人コピー等つながりにとまどう。着想は家内状況にある「金魚」の中で一等の抽象表現と作風が多彩になっているが、瑞慶村が真に執着するテーマをつぎ次回に見たい。

【大城千賀子「記憶のかたち」】

厚手の木片とベニヤ板を幾重にも張り合わせた壁を素材に、画中の立体造形を浮みあがらせる。

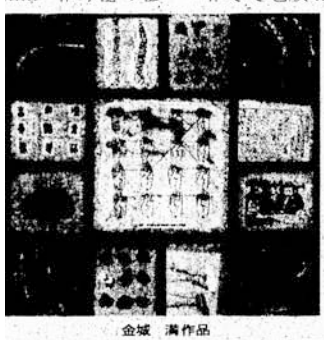
【牛渡悦子絵画展】

岩肌、水面の緑、草原等が反発する森の効果を楽しむように黄色の線描を黒い面が御している。

【儀間比呂志版画風土記「いま沖縄」展】

儀間さんの個展会場はいつも声高な感覚でにぎわっている。儀間さんの声の大きさにくわえて、観衆が作品の鑑賞に素直に引き入っている大らかな雰囲気がある。

今回「いま沖縄」と銘うったのは一九六年に版画風土記沖縄を出して、儀間さんの



金城 満作品

衝をくずしながらある流れにそって動いている。褐色、灰緑、ダークブルー等沈んだ色調でひかえめに画面を構成していく真栄城は抽象作家としては稀（まれ）な寂然とした作風である。

【伊良部東勝絵画展】

沖展、県展で見せる伊良部の作風は、黄緑系の重厚なマチエルを薄地に大小の円が配された抽象作品であるが、今回の小品展では「花畑」と作

言う「あれから二十三年。日本復帰、海洋博、国体と、沖縄はあれよあれよと巻き込まれるようにそのなかにひろがる空間、その中に飛び交う赤、緑の強いコントラスト、一変してなんか赤褐色系の緑配雑と動き、今回その緑配雑のグリッドの線上にあってなお周囲の岩肌、「島」「基地」のシリーズに現代を慟哭する熱い視線を風刺するように、また、那覇の石畳（やゆ）するかのように平面が飛ぶ。頭脳、骨髄（はきず）の解説、生徒の文者の戦争追体験を託い）の解説、生徒の文者の戦争追体験を託した「戦後」の連作。また人コピー等つながりにとまどう。着想は家内状況にある「金魚」の中で一等の抽象表現と作風が多彩になっているが、瑞慶村が真に執着するテーマをつぎ次回に見たい。

【大城千賀子「記憶のかたち」】

厚手の木片とベニヤ板を幾重にも張り合わせた壁を素材に、画中の立体造形を浮みあがらせる。

【牛渡悦子絵画展】

岩肌、水面の緑、草原等が反発する森の効果を楽しむように黄色の線描を黒い面が御している。

【儀間比呂志版画風土記「いま沖縄」展】

儀間さんの個展会場はいつも声高な感覚でにぎわっている。儀間さんの声の大きさにくわえて、観衆が作品の鑑賞に素直に引き入っている大らかな雰囲気がある。

今回「いま沖縄」と銘うったのは一九六年に版画風土記沖縄を出して、儀間さんの

コンセプトアートを、超えて
美学の核爆発

VOICE INTERVIEW②

■画家・金城 満

ノイズ、気体、液体、固体、情報…。金城満は、一見絵画の素材からかけ離れているように思える事象を、貪欲にかき集める。そして、遺伝子の思考をとてつもない時間の中で、直立させたり、あぐらをかかせたりする。美術の新たな地平を目指す氏に語ってもらった。

※GV＝ギャラリー・ボイス

GV　あけみお展、金賞おめでとうございます。

金城　どうもありがとうございます。

GV　標題は、「ノスタルジー」でしたが、作品について少し話して頂けませんか。

金城　僕が言いたかったのは「体験」ということなんです。単に自分の体験と言うのではなく、永い過去から受け継いできた“血”みたいなもの。それに対するノスタルジーと言えます。遺伝子レベルで考えてほしいんですが、人類発生から35億年たっていますよね。そういう永い時間に対するノスタルジーなんです。

GV　金城さんの最近の精力的な仕事には、びっくりしてしまいます。ところで、学校の教育現場におられる現在、創作の時間はどのようにとっていらっしゃるのですか。

金城　とにかく教師は“忙しい”人種なんだと思います。何もないみたいだけど、何もかもあるようにしてしまう現場なんですね。それは仕事自体がシステム化されていないからなんです。ですから、そこに入り込んじゃうと、とてもじゃないが創作の時間なんて皆無ですよ。僕の場合、仕事をシステム化して、ちゃんと整理するようにしています。

GV　なるほど、仕事に縛られることなく、創作の場も考えているわけですね。さて、実に興味深い金城さんの作品なんですが、創作上のことについてお聞きしたいと思います。管理社会から逸脱することの必然性みたいなものが、金城さんの一つのテーマになっているわけでしょうか？

金城　どんなに頑張っても逃れられないものがあったら、その中で逃れられる部分はどこかと考えるべきだと思うんですね。管理というのは一つのルールですから、まずは受け入れよう。だけど、許される部分は逃れようというわけです。

自分の作品から引用して言うと、わざと枠組を作って、そのどこかを壊すことによって息をしてみる。ところが全体を壊すと、管理慣れしていますから今度は不安になる。よって管理を求めると思うんですよね。だから、どこを壊せばより効果的に深呼吸ができるかを考えるわけです。こっち側から、逆にどう管理を笑うことが出来るか、管理に対する批判が出来るか、ということなんですね。

金城 満氏

GV　グローバルな視点から、社会システムの枠というルールを設けて自己の意識の規律とのかかわりあいがテーマになっているわけですか？

金城　なぜ管理が必要か、なぜ枠組が必要かというのはもう知的な部分でしか理解できないと思います。

自分の細胞の維持というのは決して自分がしていたわけではなく、自分の先祖がしていたことなんだ。程度の差はあれ、どういう時代であれ、私たちの枠は遺伝子に組み込まれているだろうと思うんですよね。だけど隙間のない枠は息が詰まりますから、隙間を意識的に作りたいし、多分意識の助けを借りて枠を壊したいという欲求が起こるんでしょう。しかし根源にあるのは、無意識の世界という遺伝子レベルの世界ですから、簡単にはいかないわけです。

美術というのは、絵を描くんではなくて、時間の中で息が詰まりそうな自分というものを感じたいと言うことだと思います。

GV　例えばサガンは、自分の表現するものは「魂の告白」と言っています。時代を生きる無意識の中から出てくる遺伝子レベルの表現欲、イメージを、今を生きる作家が前面に推しだそうとした時、例えば公式を学んで絵画してます、というのはありうることだというわけですね。

金城　公式は、どう使おうといいんだけれど、公式を使う必然性がわかってないとおもしろくない。公式のおもしろさというのは、なぜこんな公式になったか分かった時のおもしろさですよね。あの感動の裏にどんな時間が流れているのかその中から材料を持ってこないとね。

美術の新鮮な公式は、美術の中にはないような気がします。変な言い方ですけど、それは他のモノにあるんだと思います。美術の公式は自分の公式を持つための一つの材料でしかないのですね。説明付けするのは、とても難しいですけど。

GV　表現する根源みたいなものは、公式を学んだからといって補えられないというか、公式の範中ではとても抱えきれないということでしょうか？

金城　この公式というのは、固定された公式ではなくて動いていくというか、絵を描く上でのテクニックでもあるし、あ

有限会社
画材専門 タナカ
代表取締役 田中興八
〒900 那覇市牧志2丁目17-36番地 TEL (0988)61-7410 沖映通りダイナハ向い

絵のレンタルリース！
月々2,000円より
画廊沖縄営業部：☎34−6706

る公式がみつければどういう表現でも負担なく出来ると思います。しかし、超スーパーエクストラというのは、出来ない気がします。というのは、その公式とは、現在感じている物からしか作れないと思うから。過去からは絶対"超"がつくのは生まれない、そこを壊すことによってしか意外性は生まれてこないでしょう。一つのパターンを足したり、引いたりした所からしか新しいものは生まれてこないと思います。また、そういった実験を常に回転させていかないと、どれが自分の公式なのか、どれが原点なのかわからなくなるし、見えてこないでしょうね。

GV　意味があるようで、ないようなまどろこしい世界というか、多面的な情報があるフラットな面から創作を始めていくわけですね。

金城　いろんな情報が一気に来るもんだから、処理出来なくて不安という信号音が出てくるんです。ピッピッピッ!情報オーバーですという感じですね。

GV　金城さんの作品の中には、いろんな形で情報が含まれていると思います。それは、一体どこら辺から来るんですか?

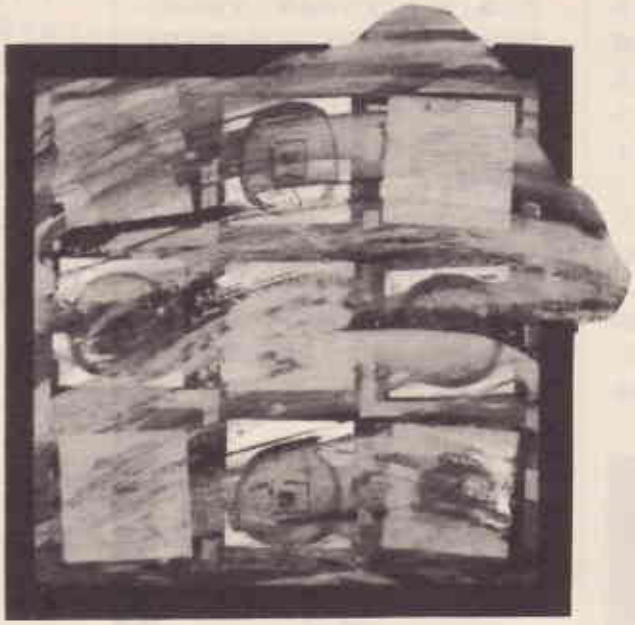
金城　私たちは、遺伝子の膨大な情報をもって生まれてきています。それがある信号によってコントロールされて、少しづつ情報が出ててくるんです。それで日常生活が出来るんです。それが、ある時期に情報が一気に飛んでくる時があります。もちろん、脳味噌は反応できない。その時に感じるのが「不安」だと思う。現在というのはいろんな情報があり、歪みが出てくる。そこで不安の形としていろんな事が起こる。それと同じように僕自身も遺伝子の中で、情報が一気に出てくる。そして不安になる。いろんな情報が来て、良い処理が出来たとき自分がやさしくなったり、好きになったりするんです。

GV　表現上のテーマというのは、あるんですか？不安を表現したいのか、それとももっと違うものなのか？

金城　不安を表現したい訳じゃなくて逆なんですよね。それから逃れたいから何か表現したいというか。

GV　表現してしまうと、やり遂げたという安堵感みたいな、不安感が解消されたという解釈が創作上あるんですか？

金城　不安を描くことによって不安を解消するという、カタルシストとは少し違う気もするんですよね。問題は、まだまだ解決されませんね。手探り状態と言ったほうが正しいと思います。



金城 満　「管理社会」

GV　金城さんは、実に不思議なコンセプトを持っていると思うのですが、そういう部分というのは、自分の流れのなかでどう位置付けしているのですか。

金城　今までのコンセプトという形が固体だったと思うんですよね。物質感があり、手で触れられるし、それを液体的にも解釈できたし、気体的にも解釈できたけど、コンセプトは基本として固体であっただろうと思います。

その時代の把握と、哲学、思想を不変化していくというややこしい作業をここまでフリージングしていく必要があるのか、僕はすごく疑問に思います。そうなると10年前の自分はそうだったけど、今はこうなんだということが言いにくくなってしまいますよね。時間をかけて固めていかないと、たかだか30代でそれに対抗する位の固体を持っているか？と聞かれたらドギマギします。

GV　ある意味では、創作の上での年齢的なこともあるわけですか。

金城　それもあると思います。僕の希望としては、創作、思考、ともにあまり固体化したくないというのがあるんです。年齢的な事も否定はしません。

GV　かなり時代的にミニマル化していますが、それに関してはどんな解釈をしていますか？

金城　圧縮にも絶えうる時代そのものが固体の時代と思います。ウォーホール時代は、大衆という固定化できるものがあったと思う。概念としての強烈なものがあったんです。

今、あえて強烈なものというのは、過去が今ある、情報が抽象化している気体感ですね。分子化していって、ゆらゆらしたり、もっと流動的なものに近いと思います。答えを出したくないし、出ない世界なんだと思う。それからすると、コンセプトアートは、固体的なんです。

概念的な主張の時代では、もはやありません。それでは、決して普遍性は持ち得ないでしょう。

GV　ミニマル化から見える、新しい流れがあるとしたら何でしょう。

金城　いわゆる、コンセプトアートは、終焉を迎えているわけで、一つのコンセプトでは納得できないわけです。僕にとっては、遺伝子が不思議、皮膚が不思議というところから、もっと普遍的な所にいきたい。

GV　表現、美学の領域が方法論において科学的に着眼しなかったわけですね。まるで美学の核爆発ですね。表現は、ミニマル化の中で、分裂、拡散したのでしょうか？。

金城　ミニマル化から、宇宙を知るところまで、いけるような気がしています。自然、社会運動も、そういう流れをくまないとダメなんじゃないでしょうか。

GV　先進国も後進国も並列化の時代。全体の生態系こそ、大事なんですね。社会、経済構造もそこから思考できるかも知れませんね。

金城　つまり、僕はコンセプトアートで切り捨てられた部分、学生運動などで無意識化された部分をいじくりたいわけです。整理していく中で、失ってしまったホコリこそ大事なんですね。結局、DNA思考に通じることなんだと思います

GV　まさに、若い世代はDNAの立場から発想するというわけですね。これからの活躍を期待しています。今日はおもしろい話、ありがとうございました。

Kentucky Fried Chicken

株式会社 リウエン商事
代表取締役社長 宮城 義明
〒901-21 沖縄県浦添市字勢理客556番地 TEL(0988)75-2168

"専門画材の店"
CULTURE PLAZA
株式会社 みつや書店
〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎(0988)63-1650代

沖縄タイムス

昭和63（1988）年10月14日

第3種郵便物認可

県知事賞に金城満さん

63年度県展入賞者決まる

六十三年度の県芸術祭・美術部門（県展）の入賞は、県知事賞に那覇市繁多川三ノ一六ノ一〇・金城満さんの絵画「プログラム」（テンペラ、一五〇号）が決まった。以下、優秀賞に宮里勲（あきら）さんの「浜辺の情景」（油彩、一〇〇号）、奨励賞には叶秀樹さん「目撃者」（リキテックス、一二〇号）、屋良朝彦さん「MY SPACE」（アクリル、一〇〇号）、知名久夫さん「ランナー」（彫刻、一五〇×八〇）の三人。

本年度は八十五人が応募、七十一人が入賞した。審査委員長の朝倉成作氏は「大作が多くそれぞれにレベルの高いものとなった。知事賞の金城満の作品は、古風な色調と前衛的な構造とがマッチして独特な雰囲気をかもした作品」と講評した。

これら入選作の展覧会は、本展が十一月二日～六日まで浦添市民会館。移動展が十一月十日～十三日沖縄市民会館、十一月十七日～二十日名護市民会館、十一月二十二日～二十七日具志川市復帰記念会館で予定されている。

【絵画】伊豆部恵勝、宮城孝也、奥原保典、宮城弘、石川勇、宮城和邦、仲本桂造、仲座勉子、大城春信、金城和男、瑞慶村むつみ、新城弘市郎、座間味良吉、山田武、赤嶺広和、与那嶺芳恵、屋嘉比正則、玉城健次郎、知名貞子、上原勲、当山武弘、梅井美羽子、伊元隆一、大城栄誠、比嘉良徳、当山進、三木元子、大城久美子、比嘉成子、宮里昌健、渡名喜元俊、中邨紘一、松本幸昌、伊是名興正、仲村恵子、長浜克英、上江田静江、仲本政博、古堅洋子、大城節子、砂川恵光、奥原トミ子、比嘉良二、奥平賢吉、宮城千鶴子、宮城晴子、花城郁子、山城政子、武嶋朝紀、上原博紀、新城剛、兼村光子、新垣正一、新垣正雄、ウルカトム、知名久夫、仲松清隆、喜久村宏、山内盛博【彫刻】松谷憲正、当山進、蔵下健、宮城次哲、大城春太郎、渡波古稜【版画】瑞慶山昇